

小学校高学年以上

モンキーさんとわたし

吉田とし・作 広野多珂子・画



913

モンキーさんとわたし

吉田とし 作 広野多珂子 画

東京 小学館 昭和60 (1985)

142P 22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ 42)

モンキーさんとわたし
一九八五年一月二〇日

定価・八八〇円
初版第一刷発行

著者・吉田とし

画家・広野多珂子

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館(〒一〇一)

東京都千代田区一ツ橋フミフー

電話・東京〇三(三三〇)五五四一(編集)

五三三三(業務) 五七三九(販売)

振替・東京八一二〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

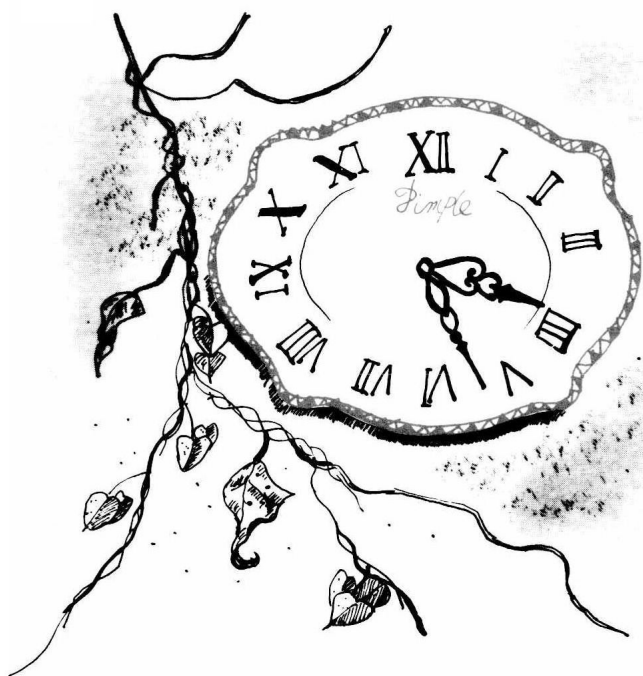
*製本にはじゅふん注意しておりますが、万一、落
丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえ
します。

*本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コ
ピー)することは、法律で認められた場合を除き、著
作者および出版社の権利の侵害となりますので、その
場合は予め小社あて許諾を求めてください。

モンキーさんと わたし



吉田とし 作
広野多珂子 画



装幀デザイン 中野博之

もくじ——モンキーさんとわたし

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
モンキーさんが帰ってくる	ギブスベッドとハチミツ	走り去った救急車	とんできたインコ	ロータリーの対決	コスモスの行進	ある日川口学級で	変人風スバゲッティー	いっしょにいかが？	黒シャツの人間国宝	“三角屋根”にきた人
138	124	113	100	86	72	57	44	31	18	6





吉田とし（よしだ とし）

一九二五年、静岡県に生まれる。日本女子大学中退。主な作品に「少年の海」（東都書房）「巨人の風車」「家族」（理論社）「木曜日のとなり」「ほくのおやじ」（あかね書房）などがある。

現住所／静岡県御殿場市中畑字中島

一五二一—一九

広野多珂子（ひろの たかこ）

一九四七年、愛知県に生まれる。マドリードのシルクロ・デ・ペーリャス・アルテスに学ぶ。第三回蒼樹会新人選拔展週間賞、コレクターが賞を選ぶ一九八〇年展コレクター賞受賞。絵本に「ちいさな絵本」全六冊（こずえ）さし絵に「あうのはいつも夕方」（童心社）「同級生たち」（偕成社）などがある。

現住所／埼玉県大宮市寿能町二—一九八—一

寿能団地五—四〇四

モンキーさんとわたし

吉田とし 作

広野多珂子 画



1
——
“三角屋根”にきた人



松田^{まつだ}のモンキーさんは、去年^{きょねん}の八月七日^{がつ}、引越^{ひっこ}しセンターの黄色^{きいろ}いトラックの助手席^{じよしめせき}に乗^のつて、この“ひぐらし団地^{だんち}”にきた。

その朝^{あさ}わたしは、小学校^{しょうがっこう}最後の夏休^{なつやす}みが、もう半分^{はんぶん}近く過^すぎてしまったのにかっかりしながら、だまりこくって家族^{かぞく}と朝食^{ちようしき}をとっていた。

ふと、肩^{かた}やうでのあたりにひんやりとしたものを感じ^{かん}じて、わたしは、なにげなく庭^{にわ}に目をやった。

すると、待^まっていました、みたいに、植込^{うえこ}みや庭石^{にわいし}、芝生^{しばふ}や水鉢^{みずばち}までがいつせいにこっちを見^みた。そのさびしそうな、なにかをあきらめたような目の色……わたしは思^{おも}わず声^{こゑ}を上げそうにな^なった。

(秋だ、庭に秋がきてる！)

でも、おかあさんと知子ねえちゃんテレビの連続ドラマにむちゅうで、どっちもあやつり人形みたいな、のろのろと手を動かして、トーストやコーヒーを口に運んでいる。反対に、お勤めに行くおとうさんは、九時には家を出なければならぬので、ドラマなど見向きもしないで、せっせと食べていた。

せっかく秋を見つけたのに、だれにも教える気がなくなって、わたしはため息をついた。すると、コーヒーをぐっと飲みほしたおとうさんが、

「ごちそうさん」

いすをズズッと、うしろに引いて立ちながら、

「けさはすずしいよ、育子。ゆだんするとかせひくぞ。見てごらん、もう夏の色じゃない」と、庭の方へあごをふった。

おとうさんも、秋がきたって感じてたのか……わたしの胸の中が、パッと光った。

「おとうさん、育子、いまおとうさんと同じことを思ってたの」

おとうさんは、わらった目でわたしを見てから、テーブルをはなれた。

おとうさんと、こんなふうに気持が通じたのは、はじめてだった。わたしはおねえちゃんとちがって、家の中ではあまりしゃべらない。おとうさんに話しかけたり話しかけられたりは、

めったになかったし……だいいち、おとうさんという人がどんな人間なのか、考えてみたこともなかったのだから。

「おとうさん、こよみの立秋はきょうじゃありませんよ。あしたが立秋。秋きぬと目にはさやかに見えねども、って、むかしの人が和歌を詠んだでしょう」

テレビに顔を向けたままで、おかあさんがこつちの話に割り込もうとしたが、おとうさんはもうそこにはいなかった。

「ちよつとだまっててよつ。セリフが聞こえないじゃない」

おねえちゃんはとがった声で、おかあさんをしっかりとつけるように言った。

おとうさんは、ひぐらし団地から車で十五、六分のところにある司法書士事務所に勤めている。市役所のそばの、レンガタイル張りのきれいな三階建てビルなのに、

「小さくてもいいから、自分の事務所を持ちたいなあ」

と、よく言っている。そのたびに、

「だけど、この家で、もう精いっぱいですよ」

おかあさんは、このうえ何ものぞめない、みたいな口ぶりで答えていた。

おねえちゃんが中学生、わたしが小五になったおとしの春、新築建売の家を買ったおとうさんは、勤め先の事務所まで歩いて行ける古いアパートから、車でなければ通えないひぐらし

団地に移ったのだから、ずいぶん疲れるようになったと思う。それでも新しい家のおいをかぎまわって、「しあわせ、しあわせ」と、うきうきしていたおねえちゃんとわたしを、いかにも満足そうにながめていた。

おかあさんもカーテンをぬったり、花の鉢を買ってきたりして、うれしそうだったけれども、「これから二十年間、ローンの支払いが続くんだから」と、ときどき、きびしい顔になった。

引越してから一年間、おとうさんはバスで通勤していたが、その間に車の運転を習って免許を取った。中古の小型車を手に入ると、門の横に、自分でコンクリートを流して、車庫を作った。

夏休み、わたしはおとうさんが車で出勤するのを、門の前の道に出て見送った。

おかあさんは玄関のドアのところで「いってらっしゃい」を言って引っこんでしまおうし、おねえちゃんの家の中で景気よく声を張り上げるだけ。ふたりが車庫まで出てこないのは、まんなの前の中本さんの家のおねえさんが、玄関わきのへやの窓格子越しに、じーっとこっちを見ているから、なのだそうだが、わたしはそんなことは気にならなかった。

おとうさんは「いってくるよ」と、わたしをちらっと見て、すーっと車を出す。わたしの家は円形の団地のいちばん外側の道に沿っているから、車はゆるやかなカーブを動いて行く。

「表通りまで、ここから直線ちよくせんで二百メートルはあるかな」

と、おとうさんが言っていたが、その表通りにコバルト色の小型車が出て行くところをながめていると、わたしはきまって、

（ああ、おとうさんは、きょうも働はたらきに行く）

と思った。おとうさんがきちんと父親ちちおやの役目やくめや義務ぎむを果はたしているのを、自分の目で確かめた気がして、胸がすっきりするのだった。

ただ八月七日のその朝は、おとうさんをひどく身近みぢかに感じたせいか、通りに出る角かどの大きな泰山木たいさんぼくのわきで、いつものように一時停車いちじていしやしたおとうさんの車が、とてもなつかしいものに見えた。

もっさりと緑みどりの葉はがしげった、丈たけの高い木きの下したに、ちょこんと止とまった車はちっぽけで、まるでおもちゃみたいな代物しろものなのに、コバルト色はくつきりと美うつくしかった。

わたしは、道に出た車の運転台うんでんたいの窓に、おとうさんの横顔よこがおが小さく黒くろつぶく見えた瞬間しゅんかん、

（おとうさん、早くお帰かえりい）

と、左手ひだりてを高く上げてふっていた。

ちょうどそのとき、おとうさんの車と入れかわりに、大きなコンテナをつけた黄色いトラックが、表通りからひぐらし団地にしずしずと入りかけていた。



そして、わたしがふった手にこたえたのは、おとうさんではなくて、朝日（あさひ）にギラッ（ギラッ）と反射（はんしや）した、トラックのフロントガラスの横からひょいと出た、だれかの手だった。しかもその手は、まっすぐにわたしの方（ほう）をゆびさした。

「いやだ、なに？ あのとトラック」

わたしはトラックの人にかからかわれたと思ったから、あわてて門にかけこんだ。

玄関（げんかん）でくつをぬぐうとしたら、車の音が近づいてきた。黄色いトラックにちがいない、重い（おも）物（もの）を乗せているようなずっしりした音（おと）だった。わたしの足（あし）は動かなくなった。

（わたしが手をふったのを、なにかかん違い（ちが）して、うちへきちゃったらどうしよう）
息（いき）をつめていると、居間（いま）にいたおねえちゃん（おねえちゃん）が外（が）を見ていたらしく、大声（おおこゑ）で言った。

「ちょっとちょっと、おかあさん、引越（ひきこ）しトラックがきたっ」

「ほんとだ、裏（うら）の売（う）れ残り（のこ）りの家（いえ）に、人が入（い）るんだ」

「はずんだ調子（ちょうし）で言いながら、おかあさんが玄関（げんかん）に出てきた。

「あら、なにしてんの育子（いくし）。三角屋根（さんかくやね）にどんな人がきたか、見（み）に行（い）こうよ」

たたきにつっ立（た）っているわたしの肩（かた）につかまって、おかあさんはサンダルをつっかけた。

わたしの家の敷地（しきち）より倍（ばい）も広（ひろ）くて、正面（しょうめん）から見（み）ると、屋根（やまがた）がとがった山形（やまがた）をしている西洋風（せいようふう）のその二階家（かいや）は、中（なか）もぜんぶ洋間（ようま）で和室（わしつ）はひと間（ま）もない、という話（わ）だった。一般向（いっぱんむ）きではない、

と思うのか、一年以上たつても買手がつかなかったから、住宅の販売会社でもないのに、わたしたちは「まだ売れない、まだ売れない」と気にしていた。中本さんのおばあさんなどは、ときどき広い庭にしのび込んで三角屋根の家のまわりをぶらついたあと、かならず、「空家はぶ用心ですねえ。脱獄囚がこっそり住みついたり、不心得者がつけ火でもしたらどうなりですかねえ」などと、おかあさんをおどかしにきた。

トラックの音はジルジルと、うちの門の前をゆっくりゆっくり通り過ぎると、ギイ、と止った。

「ここだ、ここだ」

「やあ、いいところじゃないですか」

「いまカギを開けるから、荷物は庭から入れてもらおうか」

二、三人の男たちの声が聞こえてきた。

「やっばり、だれか越してきたんだあ」

おかあさんはわたしを押しのけて、いそいそとドアから出て行った。おねえちゃんもとびだしてきて、おかあさんのうしろ姿にかけ寄った。

わたしは、とても見に行く気になれなかった。だいいち、トラックの人たちに顔を見られるのはいやだったし、手伝うならともかく、よその家に運び込む荷物を見物するだけで道ばたに立っているなんて、はずかしくてできそうもなかった。

自分のへやに入って勉強机の上を片づけていると、十分とたたないうちに、ふたりの見物人が、どこどかと帰ってきた。

「ああ、びっくりしたよう。すごい目でにらまれちゃったあ。『見世物じゃないんだ。遠慮したまえ』なあんて」

おねえちゃんが言った。

「感じわるいね。あっちこそ失礼だよ」

おかあさんは腹を立てているらしく、キンキンした声が台所の方から聞こえてきた。

「いったい、なに者なんだろうね、あの黒シャツのじいさん。二十か三十あった大きいダンボール箱の中味は本だってよ、知子。運送屋のふたりが重い重いつてぼやいていた。家具ときたらどれもこれも骨とう品みたいな物ばかり。新しいのは電気冷蔵庫だけだったじゃない？

どんな仕事をしている人か知らないけど、あれだけの家財道具じゃ家族はいないんだよ。きつとケチで、へそまがりの変人なんだ。なにさ、となりの引越しをのぞいていたからって、いきなりつつかかってくることないじゃない。あっちがにこやかに、どうぞよろしく、とでも言え

